

## 第41回電気通信普及財団賞 受賞論文 ～テレコム学際研究賞～

<順不同、敬称略>

※受賞者の所属は論文・著作発行時のものです。

### 入賞（賞金 100 万円）

#### 「InteLLA: Intelligent Language Learning Assistant for Assessing Language Proficiency Through Interviews and Roleplays」

(25th Annual Meeting of the Special Interest Group on Discourse and Dialogue (SIGDIAL), Proceedings of the 25th Annual Meeting of the Special Interest Group on Discourse and Dialogue (SIGDIAL), 2024年9月)

佐伯 真於	早稲田大学大学院基幹理工学研究科情報理工学専攻 博士後期課程
高津 弘明	株式会社エキュメノポリス リサーチ・サイエンティスト
倉田 楓真	早稲田大学大学院基幹理工学研究科情報理工学専攻 修士課程
鈴木 駿吾	早稲田大学 GCS 研究機構知覚情報システム研究所 次席研究員
江口 政貴	早稲田大学 GCS 研究機構知覚情報システム研究所 次席研究員
松浦 瑠希	早稲田大学大学院基幹理工学研究科情報理工学専攻 修士課程
瀧澤 嵩太朗	早稲田大学大学院教育学研究科教科教育学専攻 博士後期課程
吉川 禎洋	株式会社エキュメノポリス リサーチ・エンジニア
松山 洋一	株式会社エキュメノポリス 代表取締役

英語スピーキング能力判定のためのマルチモーダル対話システムを開発している。システム主導型インタビューと混合主導権型ロールプレイを通して収集した発話データから、表現の幅、正確さ、流暢さ、やりとり、一貫性、音韻の6細目をCEFRに準拠して推定している。日本全国の初等から大学までの教育機関において多数の学生に利用されている実績を踏まえ、テレコム学際研究賞にふさわしいと高く評価する。

※CEFR:Common European Framework of Reference for Languages

### 入賞（賞金 100 万円）

#### 「Feedback from an avatar facilitates risk-taking by modulating the amygdala response to feedback uncertainty」

(Public Library of Science (PLOS), PLOS Biology, 2025年4月)

田中 敏子	情報通信研究機構未来 ICT 研究所脳情報通信融合研究センター 主任研究員
春野 雅彦	情報通信研究機構未来 ICT 研究所脳情報通信融合研究センター 室長

対峙相手が人間かアバターかによってリスク選好行動が変化するという仮説を、フィードバック不確実性という単一の潜在変数に還元し、行動および脳活動の双方から検証した点に特徴がある。特に、アバターの顔表情がリスク選択を促進し、その効果が扁桃体の不確実性応答に基づくことを示した点は、計算神経科学的に意義深く、テレコム学際研究賞にふさわしい研究である。



## 奨励賞（賞金 50 万円）

「Reducing sexual predation and victimization through warnings and awareness among high-risk users」

(Springer Nature, Journal of Computational Social Science, 2025 年 6 月)

高野 雅典 株式会社サイバーエージェント学際的情報科学センター リサーチャー  
西口 真央 東京大学大学院工学系研究科システム創成学専攻 研究員  
鳥海 不二夫 東京大学大学院工学系研究科システム創成学専攻 教授

若年利用者の多い大規模 SNS を対象に、機械学習とランダム化比較試験を組み合わせることで長期の介入を行い、持続的に性的被害や加害を抑制する実証的エビデンスを提示している。効果は部分的な支持にとどまり、介入手法の一層の改善を示唆するものだが、プラットフォーム運営主体と研究者が協働し、ユーザ負担および運営者のコストを含めた実現可能性を探っており、その社会的意義からも、テレコム学際研究賞にふさわしいと評価する。

## 奨励賞（賞金 50 万円）

「EarHover: Mid-Air Gesture Recognition for Hearables Using Sound Leakage Signals」

(UIST' 24: Proceedings of the 37th Annual ACM Symposium on User Interface Software and Technology, 2024 年 10 月)

鈴木 俊汰 慶應義塾大学大学院理工学研究科 修士 1 年  
雨坂 宇宙 慶應義塾大学理工学部 研究員  
渡邊 拓貴 北海道大学情報科学研究科 助教  
志築 文太郎 筑波大学システム情報系 教授  
杉浦 裕太 慶應義塾大学理工学部情報工学科 准教授

従来ノイズとして扱われてきたヒアラブルデバイスの音漏れを能動的な入力信号源として利用するという独創的な発想に基づくものである。中でもジェスチャ分類への適用は同氏らが初めて行い、その完成度が高く評価できる。HCI 分野のトップ国際会議の一つである UIST での Best Paper Award を受賞している点も国際的な評価の高さを示しており、テレコム学際研究賞にふさわしいと評価する。

## 奨励賞（賞金 50 万円）

「Perceiving Synchrony: Determining Thermal-Tactile Simultaneity Windows」

(IEEE, IEEE Transactions on Haptics, 2024 年 9 月)

城代 拓哉 九州大学大学院芸術工学研究所 テクニカルスタッフ  
Lynette A. Jones Massachusetts Institute of Technology  
Dept. of Mechanical Engineering, Senior Research Scientist  
寺尾 将彦 山口大学時間学研究所 講師  
Ho, Hsin-Ni 九州大学大学院芸術工学研究所 准教授

温度感覚と触覚の主観的同時性を明らかにすべく、親指の付け根に+5℃の温度刺激とパルス触覚刺激を様々な時間差で与えるシステムを構築し、13 名の試験者により刺激タイミングの影響を定量的に評価している。温度刺激が触覚刺激より約 0.5 秒先行したときに最も同時に感じられるなどの結果を得ている。得られた知見は、感覚情報の伝送などの研究の発展に資することから、テレコム学際研究賞にふさわしいと評価する。



## 特例表彰（賞金 30 万円）

「Learning with the Minimum Description Length Principle」

（書籍発刊：Springer, 2023 年 9 月）

山西 健司 東京大学情報理工学系研究科数理情報学専攻 教授

本書は、MDL 原理に基づく機械学習理論を統計的モデル選択・推定の観点から、数理的に厳密かつ、体系的に解説した完成度の高い著作である。定義から応用まで明確に構成され、計算困難性や近似、実応用に関する洞察は教科書の域を超える。MDL 研究を牽引してきた著者自身による研究の総括として、研究者の入門書としても国際的評価が高く、特例表彰に値する。